
HEAVEN'S DOOR

星河 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H E A V E N ・ S D O O R

【Nコード】

N 1 9 5 4 G

【作者名】

星河 翼

【あらすじ】

主人公ティナは、黄昏時に自らの部屋に現れる扉に小さい頃から疑問を感じていた。しかしそれは、自分だけにしか見えてはいなかった。そして、十八歳の誕生日。身支度をしていた。すると、その扉が開かれた。驚いてるティナの前に扉の中から倒れこんできたのはラグナロク国のラーズ皇子であった。そのラーズの傷を癒し、ラグナロク^{ラグナロク}に行き、危機を救わなければならない宿命、自らを黄昏の女神だと知らされる。

#1 扉

黄昏時、私の部屋の片隅に現れる扉。枠が金糸で縫い装飾され、ドアの表面の部分は、櫨の木で組み合わさっている。何とも重そうな扉。そしてその扉は、私が、物心が付いた時からその場所に、見えていた。

だけど、それは私以外には誰にも見えちゃいない。

小さい頃、一度お母さんに問いかけたことがある。

「お母さん。あの扉はなあに？」

と。だけど返ってくる答えは、

「扉？何処に……？ あらあら、ティナちゃんはもうおねむなのかな？」

だった。だから、お母さんには見えていないことが判った。「でもっ」て反論しようと思っても、お母さんは、「よしよし、良い子だからベッドで寝ましようね」だからそれが変なことなんだと、もう追求することは出来なくなった。

それから、時は流れ、ジュニアハイスクールに通いだした私がこの部屋にやはり黄昏時に遊びに連れてくる友達も、その存在には気づきはしなかった。

私は時々、そんな友人の前で、その扉へ視線を不自然にチロリチロリと走らせるのだけど、気づかない。そう、ただ、

「どうかしたの？ 何かあるの？」

気にはなるんだろう。訊いて来る。

「ねえ、この部屋に扉はいくつあるかしら？窓じゃなくてよ？」

だから、そんな問いかけを試してみる。

「扉って、一つしかないじゃない」

と、一度部屋をぐるりと見渡して、結局はこの部屋に入ってきたその扉を見る。やっぱり、私にしか見えてはいないみたい。

「そうね。じゃあ、続きしようか」

と、透明ガラスの小さな机で引き続きトランプをした。

見えてはいけないもののかしら？ そうなのかしら？ 私にだけ見えるなんて。 と、その扉に何度も触れようとしたけれど、それには実体がない。 扉のノブに手をかけても素通りするだけ。 ただ私には見えるだけ。 この扉は一体何なの？ それにこの扉の向こうには何があるのかしら。 その疑問を抱えていることが、昨日までの私の毎日だった。 そう、ほんのつい昨日までの……

今日は私の十八歳の誕生日。 それは特別な日。 今まで色々お世話になったみんなとの楽しい一時の団欒でもある。 お母さんやお父さん。 そして、友達。 今夜は私を祝うためのささやかだけど、華やかな一日。

私は、一人自室で、今日の夜からのパーティーの準備をしている。 ドレスをどれにしようか？ スタンダードに花柄のフワフワドレスも可愛いんだけど、以前お母さんに贈り物をしてもらった大人っぽく少し体の線が判るフィットしたドレスも捨てがたい。 何て考えながら、ほんの少し化粧をし、長い猫っ毛の赤毛気味の髪を結い上げて、ドレスサールの前に座っている。

そんな時、鏡に映っている、あの、私にしか見えない扉が、微かに重い音を立ててギギギーっと開いた。 隙間から七色の光が溢れ出してくる。 私は、直ぐ様振り返り、ガタツと椅子から立ち上がった。 今身につけている、真っ白なフワフワドレスが揺れた。

光の隙間から、人の手のような影が見えた。 それは、女性の手には見えない。 男性の物？ 手首に何かキラキラ光るブレスレットを身につけている様に見えた。 そして、その人物は思いつきり力を入れたのであろう、扉はバーンと開かれたのである。 いや、その人物が倒れこんだのだ。

「え、何……？」

私は、その扉が開き切った瞬間私の部屋の絨毯に倒れこんだ人物

をこの眼で見て、一步退いた。ドレッサーがガタンと音を立てる。

そこには、まるで春の優しい新緑の芽のような緑の髪を、後ろで一つに束ねたその人物が横たわっている。キヤー何て叫びたい気持ちもするけれど、それは出来なかった。多分この出来事に逆に驚きすぎたのだろう。よくよく見るとその人物は、肩に怪我をしているらしく、ピクツとも動かない。

私は、オロオロするしか出来なかった。だって、ハイスクールまで男性と言う者と干渉を持ったことが父と先生以外無かったのだから。いや、男の子と遊んだ事はあったかな？ たった一度だけだけど、かなり幼い時に。

そんな時、その男性の胸元から小さな妖精がモゾモゾと這い出てきた。胸元と、手首、足首に小さなフアーが着いていて、羽根は筋が見えるくらい透明。光る粉をパタパタするたびに辺りに振りまいている。そんな妖精が、私に気づき目線まで飛んできてこう言った。「貴方が、ラクナログ黄昏の女神ね。ラーズ皇子を助けて！」

私は、唯でさえ傷つき倒れている男性に怖いと思っているし、妖精なんて見てしまった。喋るしその上女神とか言われ助けてなんてそんなことどうすれば良いのよ！

そう、頭は混乱の渦。クラクラと眩暈までしてきた。目の前にお星様が……

「ほら、伝説の女神様なら、手を差し伸べれば、傷が塞がるわ！」
そう言つて、小さな妖精は、私の指を取り、こつち来てと煽る。

私は、その言葉を何処まで信じれば良いの？ 何てことを考えるが、このままの状態にしておく訳にもいかないよね。

元々見えるはずの無いものが見えていた私。普通と何処が違うのかも知れない。そう、それはこの扉が見えていたことからそうだった。なら、もしかしたら私には一般人とは違う何か別の物が備わっているのかな？

そう考えると、やってみても良いのかもと思えてくるから不思議。

私って自分で思っているより好奇心や妄想癖があるのかしら。なんて、ドキドキしながらその人物の傍まで行き、そっと手を翳した。妖精がこうするの！って手を翳すように前に伸ばす。どうやら、差し伸べるとはそういうことらしいから。

するとどうだろう？ 私の掌から、オレンジ色の光がその人物に注がれた。

「えっ？ えーっ？」

私は、驚きの余り、小さく細切れに奇声を上げてしまった。

その光が、その人物を包み込む。それから光は拡散し、扉の向こうの光と融合して、見る見るその人物の肩の傷が癒えていく。すると、その人物は、意識が戻ったのだらう、少し低い声で呻き声を上げた。

そして、グツと力を入れるかのように、肘で体を起こす。その時初めてその人物と目が合った。何て綺麗なラベンダー色の瞳。そして切れ長の目尻がとてもクールそうで、一瞬凍りつきそうだったけど、その瞳を睨でゆっくり覆い、フツと微笑んだ。それはまるで、私に好意を持っているが如く感じられた。

「だ、大丈夫。なの……かな……」

私は、オドオドと手を口に当てながら問いかけた。

すると、その人物は、スクツと、何事も無かったかのように立ち上がり、そして、私の前に片膝を着き跪く。それから、こう言った。

「私は、ラグナロクの第一皇子ラーズです。黄昏の女神様を、我が世界へお連れするために参りました。今の我が世界は悪意に満ち、見るに絶えない状況下となっております。今一度、我らの世界を、貴女の手で平穏な世界へとお導き下さい」

そして私の手を取り、そっと礼儀としての挨拶のキスをした。

私は、ボーっと突っ立ったまま、今のこの状況と、ラーズ皇子といったこの人の言葉を頭の中で解釈しようと頑張っているのだけど、ちんぷんかんぷん。この扉の向こうに、違う世界？ そして、争いを止めるために、私が必要だなんて……

「貴女が居ないといけないのよ！　ちよつと耳の穴かつぽじつて聴いてる？」

放心状態の私の頬を抓る妖精に気づき、私は何とか、呆けている状態から自分を取り戻した。でも、やっぱりこの状況に付いてはいけそうに無いけれど……

「でも私は、そんな女神様とか、世界を平穩にする力なんて持ち合わせてはいなくて、只の女の子なんですよ」

私は、もともと口から言葉を発する。だって事実なんだから。

「黄昏の女神様。ですがたった今、貴女は確かに私を助けてくださった。それは動かない事実。自覚や、記憶が無くても、その力は本物。だから、来てください、私達の世界へ」

ラーズ皇子はそう言つて、少し私の手に触れるのを躊躇いながらも、そつと包む込むように、握つてきた。少しひんやりとしたその手。私はそのことに赤面しそうになる。

でも、ラーズ皇子ははにかんで、私に大丈夫ですから。と目配せする。その表情に偽りはなさそうだった。まるで、自然界の皇子様。柔らかな笑顔。私はちよつとだけ心ときめくのが判つた。それが恥ずかしくて、慌てて顔を背けたが、次の瞬間、フツと抱き上げられたことに気づき、キャツと声を上げてしまった。

「行きますよ。黄昏の女神様。私達の世界へ！そして、貴女を必要としている世界へ！」

そう言つた後、ラーズ皇子の胸元に入り込む妖精。妖精はあたしにアツカンバーと舌を出した。だけどその後直ぐに笑顔に摩り替える。なんて気まぐれな妖精。

そして、私を抱えたラーズ皇子は、扉の中に身を投じる。振り返つたら、その扉はギギーツと閉じられていく。今、私はあの触ることも出来なかつた扉の向こうに居る。何て事なの？　凄く複雑だけど、これが現実。これから私はどうなるというのだろう？　未来なんて判りはしない。怖いけど、今はこのラーズ皇子を信じるしかない。まるで、御伽噺のような出来事。そう、自分が主役になつたかのよ

うな……

光の渦が辺りを取り巻く。その光の中に、シャボン玉のような丸い物体の中に私の過去がフワフワと過ぎ去っていく。それはまるでフラッシュバックのような光景。私はそれを地中海の海面のような碧い瞳でしっかりと捉えた。懐かしかった。私の小さい頃が次々と記憶に無い産湯に浸かっている私や産まれる前の羊水に浸かっている様子。だけど、その最期に、キラキラ輝く金髪に碧い瞳。紫水晶のティアラを飾った女性が目に入った。誰？でも、知らないはずなのに、懐かしい。私は、知っている。この人を……

そんなことを思った瞬間、パツと景色は変わった。

そこは、常春の緑豊かな草原が眼下に広がる世界だった。所々、大理石の柱が見える。宮殿が何かの後のように感じられる。そう、ギリシヤにあるかのような跡地。私はこの場所を何故か懐かしく感じた。

その上空。私を抱えたラースが飛んでいる。

いえ、飛んでるいではなかった。丁度見えづらい位置になるんだけど、ペガサスの上に居るのだと知った。私は、この伝説の生き物、ペガサスに驚くことは無かった。そう、これにも懐かしい気分になる。あの、金髪の女性を見た瞬間から確かに懐かしい気持ちを持ち続けている。それは、此処に何かしらの想い出があるから？　ちょっとずつ私は微かな記憶を辿る様になった。

そして、暫く上空を行くと、眼下に跡地ではない宮殿が見えてきた。真つ白で、美しい宮殿。周りは堀で固められているらしく、水が絶えず流れている。そしてそれを中心に、赤い屋根の連なる村々。「あそこが、私の宮殿です。この一帯を統治している小さくもありますが、国。ラグナロクです」

優しい世界。私は思った。だって、こんなに暖かく、緑の多い国。小さくたって、判る。きっとここに住む人々は、心優しい人々ばかりであるんだろうなって。

でも、此処に来る前に、ラーズは言ったような……悪意に満ちている世界だと。これの一体何処が？疑問に想い、私はラーズに問いかけた。

「こんなに素敵な世界なのに、何処が悪意に満ちているの？ 私には理解できないわ！」

だけど、その理由がその後直ぐに明らかになった。

肌を焼き尽くしてしまいそうな熱風が前方からいきなり吹き込んで来たからである。それは、その宮殿の遙か遠くから。まるで侵食してくるかのように。

「あの、遙か彼方が判りますか？ 紅く上空を浮き立たせている場所を……ドンドンとこちらへと、侵食しているのです、黄昏の女神様」

そう、微かだが、紅く空が滲んでいる。それは、まるで悪意を持った悪魔がこちらへとやってくるかのように感じられた。

「あの一帯は、隣の国になるのですが、既に、火災の世界へと変貌を遂げました。燃え滾る、マグマの地。人々はその中でもがき苦しみ息絶えてしまいました。それはまるで地獄絵図であるかのように」

ラーズは、真剣な表情でそれを語った。それは憂いているかのように感じられた。

「皆死んでしまったの？」

私は、そんなことを考えたくは無いけれど、でも、絶望的な状況がその先にあることを知って、辛くなった。

「はい。死への道を辿りました。それは、秩序。しかし、厳密にはこの世界に死という概念はありません。死ということを意味するならば、転生するという概念です。黄昏の女神様。貴女も転生を果たされた身。だから、此処とは違う世界で生きていらっしゃったのです」

転生。そういう事もあるんだ？ 私は、判ったような判らないような……だけど、この世界に私は確かに懐かしさを感じている。それは遙かなる記憶。

「そんな訳で、この世界は魔の国と化そうとしているのです。だからそれを食い止め、この世界を元の優しい世界に戻そうと、黄昏の女神様、貴女をお迎えに参った次第です……これを食い止められるのは、あなたしかいないのですから」

黄昏の女神様……今でも信じられないし、それを受け入れられる賢い頭を持つてはいない。だけど、私はそれをしなければならんだろう。私は、この場所を、世界を、懐かしく感じ、知っているのだから。だといって、実際私は役に立てるのであるのか？ そう、どうやって？

「あの、ラーズ皇子様？ 私は、この世界を救うような力を本当に持っているの？ 貴方を助けたのは偶然だったんじゃない……私はその方法を知らない……もし出来るとしたら、それには如何すれば良いの？」

不安。疑心。いろんな感情が渦を巻く。私は一体如何すれば良いの？

「黄昏の女神様には、一度、宮殿の奥に在るヴァルハラという部屋に入っていたくことになります。そこで、自らの精神を、忘れてしまった記憶を取り戻していただかなければなりません」

ヴァルハラ。何だか聴いたことがあるような……確か神話だったかな？ 神話に詳しくない私には良くわからないけれど、余り良い印象はない気がする。

「私は一人でそこに、入ることになるのかしら？」

余計不安が押し寄せてくる。

「いえ。私も戦士です。その一人として黄昏の女神様に随行します……実は、現、黄昏の女神様は、今回の敵スルト神の手に堕ち、火炎に身を焦がされておいでです。それももう、死へと導かれる運命一度助けに入ったのですが、私もあのような始末。助ける事も叶いませんでした。とにかく時間が無いのです。いえ、もう、転生されてしまわれたことでしょう。そこで、人間界に転生された、前、黄昏の女神様をお連れするように、ラグナロク内の閣僚で決定したの

です」

ラーズ皇子も、その部屋に入ってくれと言うその言葉に少し安堵はした。したけど、今の黄昏の女神様は、既にその敵と云うスルト神の手に堕ちた事が判っている。それなのに、この私がどうにかできるものなんだろうか？ 抱えられたままの私は、思わずギュッとラーズ皇子のしなやかに引き締まった二の腕を握り締めてしまった。

「あ、ごめんなさい！」

私は、そのことを詫びた。だけど、それが逆にラーズ皇子の顔を曇らせた。何でだろう？ でも、その表情はスツと引き、

「安心してください。私が黄昏の女神様、貴女を全力でお守りいたしますから」

間近にあるラーズ皇子の整った顔が、優しく微笑んだ。あのラベンダーの瞳は、本当に綺麗で、吸い込まれそう。それがゆっくり私を覗き込む。その瞬間が、堪らなくドキドキする。

そんな中、ペガサスはゆっくり下降し、私達は、ラグナロクの宮殿へと降り立ったのであった。

#1 扉（後書き）

原稿用紙100枚程度のお話です。

輪廻とか転生とか・・・ですが、土台は北欧の方の神話です。でも、かなりいじりまくってます。

好きなように解釈してるところも有りますが、気になる方は、最期までお付き合い頂けると嬉しいです。

#2 荒野

宮殿内は、ラーズ皇子の説明にもあつたけど、厳かに神々を崇め奉っている白い石像で、廊下はそれの繰り返しだった。

その先をずんずんと歩く。そう言えば、お腹が減らないな？ 何て思つて、ラーズ皇子に問いかけた。考えてみれば、パーティー前で何も口にしていなかったのだ。

「それに関しては、大丈夫ですよ。黄昏の女神様。この世界全てが大いなる食料なのですから」

どうやらこの世界では、空腹を感じる事は無いらしい。ただ、この世界の空気すべてが食料のようなものだとの事。まるで仙人であるかのような。私は、自分がその神々と並ぶ、黄昏の女神である自覚が無いものだから、そんなことを考えてくすつと笑った。

そして、ラーズ皇子と簡略だけこの国、世界の会話を重ねた後、その、目的となったヴァルハラに繋がる扉の前に立った。

金と銀で装飾された重たい扉。この先には、戦いの地、ヴァルハラへと繋がっている。それも、私が記憶を取り戻すための試練ともなっているのだ。だけど、大丈夫。私は一人ではない。ラーズ皇子という私を守ってくれると言ってくれた人が居る。それを信じるしかない。後は、私自身の問題だろう。上手く行きますように！

「では、黄昏の女神様。手を……」

ラーズ皇子は、そつと私の手に触れて、そして扉のノブの部分の紋章に触れるように促した。私は、その通り手を触れる。すると、重たい扉の鍵が開くような音がガシャツとした。

「鍵が開いたのかしら？」

「そうです。これから私が、この扉を押します。押し切ったところで、中にお入りください。この扉は直ぐに閉まりますから」

そう言つと、直ぐ様ラーズ皇子は扉を押すための行動を起こしにかかった。かなり重そうな扉。それをジワジワと押す。重心を下半

身に移動させているのだろう。その扉を開くために脚をグツと踏ん張っているのが判った。

暫くすると、扉は軋む様な音を立てて開き始めた。ラーズ皇子の足下は床の粉塵を巻き上げそれは上昇していく。まるで、竜巻でも起こしているかの如く。それだけこの扉を開けるには力が必要なのである。私は、必死でこのラーズ皇子を応援してしまっていた。その為、扉が開ききるその瞬間を見落としそうになった。それを、ラーズ皇子が見抜き、咄嗟に、

「今です！」

と言い放った。私は、その声になんとか反応し中に入ることが出来た。ラーズ皇子も俊敏に動き中に入った。何とかホツと息がつける。「ちよつと」貴女本当にドジね！転生して、おバカになったんじゃない？あの黄昏の女神様だとは到底思えないわ。ふっ

妖精はこれでは堪えないわ！と言いたげにラーズ皇子の胸元から飛び出てきた。そう言えば、この子も居たのね。二人だけなのかと思ひ込んでいたけれど。

「ごめんなさい。あの……お名前は？」

「あたし？エアリーよ。名前なんて訊いてどうするのよ？」

「あ、名前で呼ばれた方が良いでしょう？だからなの」

「ふーん。まあ良いけどね。これから先、ラーズ皇子の足手まといにならないでね！こっちがハラハラしちゃう」

……まあ、口煩く感じるかもだけど、この子が居るとちよつと華やぐかも？私は苦笑いする。

それは、これから始まる過去への旅。私自身の使命と向き合うための試練。だから、頑張らないとね？

前に広がるヴァルハラの世界。此処で私は自分を想い出す。そして、ラグナロクを救う。前方には荒野^{ムリア}。私とラーズ皇子。そして、妖精の三人は、前へと進み始めるたのである。

荒野は、夜。三つの月が夜空を飾っている。本当に此処は不思議

な世界。何が起こるか未知数。だけど、私は進まなければならないのね。

「さあ行きましょう。旅は長い。黄昏の女神様？」

その言葉に、私は、「はい」つと答えようと思った。だけど自覚が無いわけじゃないけれど、その前に慣れない言葉を聴くのはやはり辛いので、

「あの、名前で呼んでいただけるかしら？ その、私の今の名前は、ティナって言います。」

その方が、その……」

私が言いたいことが判ったのだと思う。ラーズ皇子は、

「なら、ティナと呼ばせていただきます。ティナ？ 私のことも、ラーズと呼んでくださいますか？」

その返事に、私は心が温かくなって、

「はいっ！ ラーズ」

思わず、飛び上がりそうな勢いで返事をした。だって、堅い事抜きで行きたいし、身近な感じでホッとしたから。まるで、お友達みたい。

そして歩きながら、私達はこの夜の世界を突き進む。何時になったら朝になるのだろうか？ もしかしたら、朝なんてこないのかも知れない？

此処ヴァルハラがどういうところなのか。それを知らない私はラーズに問いかけた。すると返ってくる返事はやはり夜しかないとの事。ああ、ちよつと残念。でも、見上げる星達はキラキラと煌いてる。それにホッと安堵した。一応此処はあの宮殿の部屋の中。それがヴァルハラという一つの世界で。それを考えると、ホッと出来ないこともあったから……

だけど、違う。私はそれに安堵している場合じゃなかった。そう、行く手を遮る者が目先に及んでいた。ロキの登場がそれだった。

それに気が付いたのは、見上げながら歩く闇に浮かぶ月と星が歪んだから。いきなり、同化した色の翼と一緒にロキは、私達の前に

舞い降りたのである。

「やあ、ラーズ。我が友よ。こんな所まで来たって事は、また何かあったのか？ 外の世界で。と言つても俺には関係ないけどな。ただ、此処を通るということは、俺の許可が必要だつて事は知ってるよな？ 神々の宮殿、我等が父オーデインの住まわれるヴァルハラなんだからよ」

その者は、漆黒の翼をたたみ、ラーズの目の前までやってきた。そして、面白おかしそうに見下ろしながら腕を組み、にたと笑つた。

私は、ギョツとしながら一瞬その者の顔を見上げたけれど、その者の金色の眼光が私の視線と交わると、怖くなって思わずラーズの後ろに隠れた。ラーズはこの者を知っているかのように、ただ、とにかく怖いという気持ちが先走つたのである。

「大丈夫ですよ。テイナ。このロキは、私の古き親友でもありますから。でも、ちょっと離れていてくださいね」

そう言つと、ラーズは胸元のエアリーを解き放ち、何やら呟いた。「テイナ？ エアリーと暫くその岩陰に隠れていて下さい。一戦交えないと納得してくれないでしょうからね」

ラーズは続いて私にも聴こえる様に言った。一戦つて、これから戦うつて事？ それつて、危険なんじゃ……

エアリーが「こつちよ」とその方へと私を導く。私は、これからどうなるんだろうとそわそわしながらも、その通りに動く。だつて、私は援護できるだけの力なんて無いのですもの。

だからそつと物陰からそのラーズを見守つた。

「おつと、今の女つて、もしかして、あれか？ 転生してしまった黄昏の女神様」つてやつか？ ラーズ、今でもまだ愛してるのかな？」

ロキは、ヘンって鼻を鳴らしながら言い放つた。私はそのロキの言葉を聴いて、ショックを隠せなかった。ラーズが私を愛していた。それは本当のことなの？

だけど、ラーズのあの時の曇った表情を思い返すと……本当だったのかなと思えて、複雑な気持ちになる。でも、私は、ティナという人間の女の子としての記憶が殆どで、ラーズに対してどうこうという感情など無い。確かにときめく瞬間もあつたりしたけれど、それは、私が男性というものに慣れてないからだと思っているし……

「あの子はティナだ。確かに転生を果たされた、あの黄昏の女神様ではあるけれど、今それは関係ない。いや、関係ないと言い切れないけど、ティナなんだ……で、ロキ。戦わないと進めないって事だろう？ンならば、一戦交えるしかないだろう。お相手願う」

結果二人は戦いへと誘われる。ラーズは、手首の金色の腕輪の一部を触ると、手元に野太い槌のような物が浮かび上がった。

「あれは、ラーズ皇子の武器、ツールハンマー。別名、ミヨルニル。一度それを解き放てば、どんな物も投げると打ち砕いて、手元に帰ってくる武器よ」

エアリーは、誇らしそうにそう言った。

「へーラーズ。本気でやるつもりなんだ？」

そんな中、ロキは手元に、槍を構えた。

「そして、あれがグングニル。ロキの武器。どんな物でも投げたら貫き、同じく手元に帰ってくるという代物。こうなったら、どちらかが倒れるまでの一撃勝負ね」

エアリーは興味深々にその様子を見ている。

でも私は、そんな気分にはなれない。だって、あんな物で戦うのよ？どちらかが倒れるまでって……それはどちらかが血を流すまでって事でしょ？ そんなの見たくないよ！

私は、想像したくなくて、岩肌を目を瞑って体を寄せた。でも、エアリーは、

「これはあなたが見守らないといけない勝負よ！ ティナが力を、記憶を取り戻すための試練でもあるんだから！」

と、私の耳を引っ張って言った。

私が見守らないといけないの？ それが試練なの？ そんなの嫌

！でも、既に荒野に立ち尽くしている二人は、目標を決めている。そう、もう既に戦闘体制なのだ。誰にも止める事など出来ない。判っている。でも……

心は鋼を打つかのようにドクンドクンと鳴り響く。私は、せめてラーズが倒れないことを願って祈ることにした。

ラーズとロキは、ジリジリと間合いを読む。それは、神経を集中し敵が気を抜いたところを突く作戦のようにも思える。武器自体、一回が全てであるのだから。

だからこの場の空気も凄くピリピリとしていた。まるで、二人の殺気を張り巡らせているかのよう。

先に仕掛けたのは、ロキであった。グングニルという武器を、ラーズ目掛けて投げる。そして、その場を瞬時に移動。ラーズの真後ろへと回り込んでいた。しかし、ラーズはそのグングニルを素手で掴むと、真後ろに移動したロキにそのグングニルを投げた。まるで、ロキがそうすることを確信していたかの如く。

でも、ロキはそれを一応頭に描いていたらしく、そのグングニルの柄を掴むと、今度は後ろ向きでそれを掴み投げ返した。でも、今度はそれを予期していたのだろう、ラーズがミョルニルを振り下ろしそのグングニルを地面に叩き落した。そして、瞬時ミョルニルをロキ目掛けて振り下ろせるまで間合いを詰め、振り下ろす。その動作はかなり素早かったけど、私は何とか目に止める事が出来た。

そのミョルニルは、ロキの背中……翼に命中。その翼を折った。瞬間の事だったけど、決着はついた。ロキは確かに地面に突っ伏したのである。

「さて、もう、此处を通っても良いかな？ロキ。勝負は私の勝ちだ」
ラーズがそう言うと、ロキは、折れた翼を引きずりながら、
「嫌になっちゃうね」ラーズは全く本気になると手加減しないんだから。この翼、当分治らないぞ？」

ロキは、痛そうな表情は見せながらも笑っていた。なるほど確かに親友なんだな。と思える一コマがそこにあった。私はふっとた

め息が出た。ラーズは健在。一応敵である勝負を仕掛けたロキは参ったと降参。

これで、ここは通り抜けできる訳だ。

「エアリー。もう良いよ。ティナも出てきてください」

ラーズは緊張感を解いて、私達を今居る二人の場所まで呼んだ。

私とエアリーは言うとおりに、その場へ向かった。

「ロキ。今は、ラグナロクの危機なんだよ。現在の黄昏の女神様は、スルト神の火炎に身を焦がされ、きつと転生なされてしまった事だろう。だから今は、ティナに記憶を取り戻して貰い世界を救ってもらうしかない。あの世界はもう、その名前の通り、終焉の世界へと導かれてしまう。だから、力を貸して欲しい……」

ラーズは、そう、ロキに頼み込んだ。もしこのロキがこの先仲間になってももらえるのであるならば、願ったり叶ったりだろうから。

しかし、ロキは優柔不断な性格なのか、

「気持ちには判るが……それは出来ない相談だぜ？ 俺はヴァルハラを守る為に此処にいるのさ。外の世界の事など知らない。でも、力を貸してやらないと言う訳ではない」

ロキは、ずる賢そうな笑みを浮かべながら、ラーズにこう言った。「此処に来たのは、転生してしまった元黄昏の女神様の記憶を取り戻したいからなんだろう？ だったら、その手伝いで、その内の一つの記憶を俺からプレゼントしてやろう。それで勘弁してくれんかい？ 一応俺にも守秘義務ってモノがあるからな」

守秘義務ってのは、このヴァルハラのことなのか？ それとも、今外の世界で起こっている惨劇の事なのか？ それは判らない事だけど、とにかくにも、私のヴァルハラでの確かな記憶が少しでも手に入るのであるならば、これは意味のある事だろう。

私はそれだけでも充分だと思った。

「ロキ。ありがとう……」

ラーズは、親友というこのロキに礼を言った。私も、一度怖いと

思ったこのロキに一礼して見せた。見た目は怖いけど、良い神様だ
と思ったから。

「じゃあ、この先をずっと行った所に、クレバスがある。その場所
に立ち寄りな。そこからヴァルハラ中枢部へ移動出来るシステムに
なってる。そこで記憶は少し戻ると思うぜ」

ロキは、その方角を指差した。

「判った、それでは先を急ぐから、私達は行くよ。悪かったな、翼
傷めてしまつて」

ラーズは、詫びを入れていた。私は、親友を大切に思っているラ
ースを、本当に優しい皇子様だと思った。口には出来ないけれど、
本当に、素敵だなつて。

「こんな物は、その内回復するぜ？ 良いから行けよ。それでもつ
て、ラグナロクの事はお前に任せたからな。あ、あと、その女神
様にもな」

私はその言葉に、類は友を呼ぶという言葉を知った気がする。お
互いを労われる心。それは、確かに友情なんだなつてね。

「判った。テイナ、エアリーじゃあ、行こう。

私達の目的を果たしに」

ラーズは、そう言つて手を振るロキにさよならを言つて私達は目
的地へと向かつたのである。

#3 戦乙女スクルド

荒野の先の岩肌がデコボコしているクレバスに着くと、私達は金色に輝く糸紬が空から吊り下げられているのに気づいた。これが、ロキの言っていたシステムの鍵なのかしら。

「これ……なんでしょう？」

私は、それを引っ張ろうと命いっばい背伸びをし手を伸ばした。しかし、届かない。

「ティナ。私が貴女を肩車いたしますから、それを手にとって見てください。あの糸紬は、紋章が彫られています。きっと、天に繋がっているはずですから、私達を導いてくれるでしょう」

ラースはそう言うのと、跪き肩車が出来る体勢に入った。私は、白いつわつワドレスのまま、気恥ずかしい気分になっただけで、それしかないかとも思い、ラースに肩車をしてもらう。そして、その金の糸紬を掴んだ。

糸紬を掴んだ瞬間、辺りは真夜中から太陽の昇る世界へと変貌した。それは、夜明けのような世界。夜の無いヴァルハラに、光が満ちる。そして、私達は天へと駆け上るかのような勢いで、引き寄せられる。それは、七色の虹の掛け渡しのような空間を通して。

天空に着くまで私は、夢を見ているかのような光景を目の当たりにした。目の当たりというには言葉が違うかもしれない。そう、その人物達と同化していた。きっと体験しているのは私だけなのでは？これがロキの言っていた私の過去の記憶の一つ。

私は、ノルニル。運命を司る女神の一人。そして、三人の女神、長女ウルズ、次女ヴェルザンデイ、三女スクルドという姉妹の内の三女スクルドである事を想いだした。

私は、未来を司る運命の女神。世界樹であるユグドラシルの根元にある泉で寛ぐ三人の女神の中に私は存在していた。気が強く、勝

気なウルズお姉様と、大人しく、心優しいヴェルザンディお姉様と一緒にいる私。

お姉さま方は、常に泉の水を汲み出してはユグドラシルに水をやる事を心がけていた。後は、ルーン文字を刻む。ルーン文字とは、一種の魔法文字。神々の長オーディンが発明したといわれる物。

しかし私は、お姉さま達とは異なり、ワルキューレ。そう、ラーズと同じ戦士、女戦士ヴァルキリーである。戦いそして、戦死者を選ぶ人間。いわゆる、戦乙女。というのであるうか。

私が戦い、そして、未来は在る。

そこで目が覚めたような感覚。気がつくと、ヴァルハラの天空の雲の上。ラーズ皇子が、心配そうに寝込んでいる私の顔を覗き込んでいるところで目が醒めたと言う訳。

「ごめんなさい。私寝込んでた」

一気に情報が頭の中に入り、クラクラとするけれど、今見たのは、確かに私の過去。そして使命としてきたことなのね。

記憶媒体の一部が自分自身で把握できる事は一つ。私は、戦わなくてはならない人間だったと言う事。

「いえ、ティナ。貴女に架せられた使命というものは絶大でした。女神様でありながら戦うという使命を担っていた。三人姉妹の中で貴女は他の女神様達とはまた違った未来をも担う戦士という重い枷それを、転生した平和な世界から私は呼び戻した。だから謝らないで下さい」

そう言つて、ラーズ皇子は私の額に優しく手を乗せて辛そうに微笑む。何て大きな手。この手で、この世界を守ってきたのね。私は、それをヒシツと感じて、ラーズ皇子を見上げた。貴方こそ、そんな顔をしないで……

確かに私は、この世界に来なければ、戦うなんて辛い事を目の当たりにしてはいなかっただろう。だけど、私のいるべき世界だって、競争社会であり、強者が弱者を押さえつける世界だ。

学校で言うならば、テストはあるし、試験。社会に出たらもっと

大変な醜い世界だつて有るに決まっている……私はそれを見て見ぬ振りをしてきた。だって辛いでしょ？ だから今まで考えようとはしなかった。それは、あの世界にも確かにあるんだ。キリスト教で言うなれば、バビロン社会と言えそう。ただ、死をもたらすような争いごとではないけどね。

「ありがとう。でも私は、自分が何であつたのか。それを想い出してしまった。だから、ラグナロクを私も守らなければならない。今はラース、貴方と共に……」

私は、横になっているその体を起こし、そして、立ち上がった。そして、戦うために、今身に纏っている白いフワフワドレスの裾をビリビリと破った。

「ティナ！」

ラース皇子は、それを止めようとしたけれど、これで身動きが出来やすくなる。転生前の鎧や盾、そして剣を持っていた、そんないでたちとは違うけれど、それでも、今はこの方が良い。そう思った。「ラース？ 私達は、同士。だから、ラグナロクの為に、戦いましょう。私も今はまだ微力かもしれないけれど、戦います」

決心をつけると、私は結い上げている今の髪を、解れない様にギョツと今破いたドレスの一部できつくもう一度結び直した。

「……はい。ティナ。貴女の仰せのままに」

ラースは、そんな私を、膝を着いて見上げた。それは、複雑そうな表情だったけど、決心が揺るがないだろうともう悟っているのか、口元を引き締めるように吊り上げて笑った。

「ちよつとちよつと！ そんなところで誓いの親睦なんて固めてる場合じゃないでしょ。次どうするのよ！ ラース皇子！」

ここで、安らぎ妖精エアリーの登場。一応、私達の簡略された誓いの儀式を邪魔する野暮な事はしなかったわね？ 私は、そんなエアリーの頭をナデナデしてしまった。

「まっ！ 失礼しちゃう！」

エアリーは、それでもラース皇子のために働いているのよ！ っ

て言いたげに頬を膨らませた。でもそこが素直すぎて可愛くて仕方なくなるんだよね。

「では、進みましょう。時間も少ない事ですし。此处から先は、天空の間。行き着く先には武器庫があります。そして、そこを守っている神々も……」

そう、ゆっくりなどしてはいられなかった。私は、ラーズのその言葉で目が醒める。

「簡単に通してもらえるかしら……」

「それは、私達次第でしょう。今度は親友の口キの時とは訳が違いますから。神々の意向が、私達の意向と一致しなければおそらく……」

ラーズは、そこで言葉を切った。でも、今の私には判る。その先の言葉。戦うしかないのだと……

ヴァルハラ雲の上を私達は歩く。真っ黒な雲の上。まるで下は雷雨でもあるかのようなそんな雲。でも、その雲の上は、下から伸びる木々で埋め尽くされている。上空は、やはり夜。空気が冷たく、ピンと張り詰めた空気が漂っている。

そして、その木々の道をドンドン進むと、ペガサス達の群れが雲の隙間の泉の畔に居た。

私達は、そのペガサスの一頭に声をかけた。

「これから、少しだけ貴方に武器庫までの道を案内してもらいたい。私と、こちらのティナを乗せてもらえまいか？」

ラーズは、少し敬った言い方をした。

『貴方は、ラーズ皇子。結構ですよ。で、ティナさんというのはこちらの女性ですか？』

ペガサスは、嘶きながら私の方に顔を向けた。

「そうです。私がティナです」

私は、静かに答えた。

『どちらかでお見受けしたような気がしますね？ああ、もしかして、

黄昏の女神様ではありませんか？覚えておいででしょうか？私ですよ！」

そうペガサスは、思い出したかのようにアピールしてきた。えっと、どう答えようか？

「そうですね。ティナは、ペガサスと戯れるの好きでしたし。乗ってるその姿もあでやかでしたね？」

と、ラースは良いタイミングで相打ちを入れてくれた。という事は、私は、ペガサスに乗ったことが有ると言うことなのだと判った。そう懐かしく感じたのは、ペガサスに私自身が乗っていたからなんだと。

「ええ、色々お世話になりました。この度もお世話になって宜しくて？」

その言葉を上手く出せたと自分でも思う。

だって、記憶の断片でしかまだないから。

『勿論ですとも！喜んで！』

ペガサスは、そう言って、私とラースを背中に乗せてくれた。前に私。後ろにラース。ラースは、気を遣ってくれたのか、私が落ちないようにと上手く支えてくれる。そして、こっそりと耳元で囁いてくれた。

「その内想い出しますよ。体が自然と」

私は、その言葉に、そうだね。と相槌を打つ。そして、木々の上を駆けていくペガサスの首にしがみつき、一気に武器庫へと、その神々のいらっしやる場所へと向かったのである。

武器庫は、木々を退けた白い宮殿内に在った。まるで、戦いがあるときの為に設えているかのよう、に、荘厳と。

私は、自らが身に着ける事が出来そうな武器を手に取り、そして、身に纏った。少し重たいけれど、でも、体にはフィットする。肩当て、胸当て、鎧に、白鳥の羽が付いた兜。そして戦闘能力の上がるブレスレット。それは、私があの時夢に見た物と同じ物。これは、

私の武器を収納しておく為の必須アイテム。そう、剣を収めておくためのアイテム。

それらを身に着け、私はラーズの元に駆け寄った。

「見事にお似合いで……ティナ」

褒めるというより、懐かしさを感じているように感じられた。私は、

「ありがとう」

と返した。でもラーズは、そこにある武具を身につけてはいなくてそのままだった。

「ラーズは、大丈夫なの？ その格好で」
返す。しかしラーズは、

「私はこれで充分です。このスタイルが、私自身ですから」
軽装。鎧などは身につけてはいない。武具と言っても楔帷子くらい。俊敏さも必要ということなんだろう。

ラーズは、次のことにもう頭を働かせているみたい。そう、此処を通り抜けるには、新たな神々との交渉がある。それに、もしそれを認められなかったら、戦いだ。ラグナロクのための。

私も、気を引き締めないといけないんだった。でも、どんな神々が居らっしゃるといえるだろうか？ オーディンではないことだけは確か。きつとオーディンは、もっと高みにいらっしゃるであろうから。それが私の印象。

孤高として輝き、それでも神々にそして、人々に慕われている。

それがオーディン。

だからこそその主神格。

私達は、その武具庫の部屋を後にする。

目の前には、大きな扉。これも頑丈そうで、厚みのある扉。このヴァルハラに来た時の様に、私は手を紋章に触れ、そして、ラーズが扉に力を込め開ける。そして中に入った。

中に入ると、重圧を感じるような、重々しい空気が流れていた。

「空気が今までと違うね。これが今まで居たヴァルハラなの？」

夜と言うその条件は同じだけど、それよりももっと深い闇。だからといって、苦しく感じるというわけではない、ピリピリとした張り詰めた空気って感じ。

そんな時、遠くの方で、地鳴りが聴こえてきた。まるで、この空気を戦闘へ導く為の、悪意ある物に摩り替えるための……

「行きますよ。ティナ！」

「はい！」

そして、私達はその方角へと走り出す。待っていても何も変わりはない。この地鳴りを受け止められるだけの力を得るために。

地鳴りの現象は、私達という異物を排除しようとするベルセルク達の一行であった。

別名、狂戦士。戦うためにだけ存在する、凶暴な戦士。

私と、ラーズは、突進してくるそのベルセルクの前に立ち塞がると、自らの武器をそれぞれ持ち、それを振るう。

私は剣を。ラーズはミョルニルを。

ラーズが投げるミョルニルは、呻りながらベルセルク達を退け、そして、倒す。私はその隙間を見計らって、剣を振る。ベルセルクは、一人一人がそれに対応するために向かってくるけど、私達のコンビネーションの方が上手。

初めて、ティナとしての意識を持った私が戦うという事をしたけれど、何故だかラーズとの息はピッタリと合う。こんなにも直ぐに合うものだろうか？　まるで、裏と表。光と影。鏡に映した自分の影のような存在。

そう感じた。

もしかして私とラーズはというより、スクルドとしての私は彼と、こんな風に戦った事があるんじゃないかなって思われる。

そう、私の過去はまだラーズに絡んではいない。彼のことは未知数である。ラーズは私にとっての何？　そう思っけれど今は、この

ベルセルク達をどうにかしないといけないので、頭をそちらに切り替える。

そして、この全域のベルセルク達を倒しながら前へと駆け進む。彼らの群れは、そのまま置き去り。私達は、後ろも振り返らずに、一気に駆け抜けていった。

そして、気づいた時には、雲の階段が眼前に有った。それは、また天空へと繋がる階段。

私とラースは、目配せだけして、その階段を上った。何も言わなくても、道はこれ一つ。そう判断したから。

階段を上っていくと、眼下にヴァルハラが通ってきた暗闇の道が広がる。しかし、光の泡がプカプカと、上空に浮かんでくる。それが何なのか？ 今の私には判らないけれど、この世界の秩序のような気がした。だから、ラースの後を、付いて歩く。そして、階段は途切れた。

また、暗闇の世界。ピーンと張り詰めた空気もそのまま。私は、それがヴァルハラなんだと再度理解した。

「ティナ？ お怪我はございませんね？ この階は、先程とは違はかなり厄介な場所です。私に一任下さい」

ラースは、一声掛ける。この階の事を理解した上で私に言っているのだろう。

私は、軽く頷いた。

その私達の前に立ち塞がったのは、ジグルズと云う鍛え抜かれた強靱な体を持つ英雄神だった。

「ラース皇子。此処に用があると言う事は、外で何かあったと推察して良いのだろうか？」

彼を知っている分、少し安心していただけたけど、ここを何故彼が守っているのであるのか？ その疑問が渦を巻く。

「ラグナロクの危機だからです。ジグルズ様。スルト神が反乱を起こしました。その為、此処に居るティナに過去の記憶を全て取り戻していただき、今の状況を打開するために参りました」

ラースは、単刀直入に告げた。

「なるほど。で、ティナと云うのは、そちらの女性ですか。ああ、なるほど。黄昏の女神様。スクルド様……ではありませんか」

私に目を向けた瞬間、ジグルズは直ぐに私が誰であったのかを判断した。私も彼を知っている。確か、ワルキューレのうちの一人と恋人であつたはず。だから印象深い。

「ええ。そうです。その後ジグルズ様もお変わりなく……」

取り敢えず、想いだせる範囲で、社交辞令。

「私達はここを通りたい。そして、ティナの記憶を全て取り戻すために、オーディンの元へ行きたいと思つている。通してくれませんか？」

社交辞令の先には交渉。そう、ラースは先を見ていた。

「それはなりません。此処を通る権利があるのは、その任を得た者ののみ。今それを許す訳には参りません。それが、此処ヴァルハラのだ。ラグナロクがもし滅亡しても、それはそう決まった運命。だからオーディンの采配無しに貴方たちを此処から動かすわけにはいきません」

ジグルズはハッキリと言い切った。

確かに、オーディンがあのだラグナロクのことを気にかけていない限り、自らが動こうとはしないであろう。それは考えてみれば不自然だ。そう、オーディンなら神々を率いてでも行動を起こす。神々の長がそれを知らないはずはないのだから……疑問が一つ生まれた。「では、仕方がありませんね。貴方を倒して通らせていただきます！」

ラースは、そう言うと、手首のブレスレットを触り、浮かび上がった槌、ミヨルニルを右手に構える。

ジグルズは、腰に下げている鞘から剣を引き抜く。その剣は、有名なグラムと言う代物だとエアリーが言った。

「私は何をすれば良いでしょう？」

一任して欲しいと言われたけれどこのまま二人を見ている訳には

いけない。そう、私ができる事はないか？ それを探さないと……でも、考えている間に、ジグルズの後方から、巨体のトロルド達がゾロゾロとこちらに向かってくる。

「ティナ！ 貴方にはあのトロルド達をお願いします！ 彼らならベルセルクの群れを通ってきた今の貴方でも止められます。せめて、私がこのジグルズを倒すまで足止めを！」

私は、ラーズのその言葉を信じ、トロルド達と向き合った。そして、自らの剣を携え、立ち向かったのである。

金銀財宝の山に住む妖精トロルド。何故こんなところに？ だけど、今はそれが問題ではない。今はこのバイキング姿で襲い掛かるうとするトロルド達を私が倒すしかないのよね。

巨大で粗暴。大雑把なトロルドであるから、私は俊敏に体を動かす。そうすると、トロルド達は足を絡ませいつせいに倒れた。そこを、剣で叩きのめす。と言っても眠らせるだけにとどめる事にした。ティナとしての意識が殺すという事を躊躇ったからである。もしこのティナとしての意識がなければ、私はこのトロール達を全て切り裂いていただろう。それを考えると、怖いと思った。人格と、人格を形成するための環境。その違いと言う物が判った気がする。

さて、私の方は片が付いたので、ラーズと、ジグルズの戦いの方に目を向けた。

ラーズは苦しんでいる模様。流石に、神々の中でも英雄とも謳われるジグルズを本気で相手しているとなると厳しい。

鋼鉄のような体のジグルズ。その体に、ラーズのミヨルニルは役に立たない。体を貫くにも、硬すぎる体のジグルズだからラーズの武器も無効。まるで最強の盾。それは、見ている方がハラハラさせられる。追い込まれるラーズは、ミヨルニルから雷を発し、後方へと移動。そして、またミヨルニルを投げる。

この戦いの果てというものは有るのであるのか？ そう思わせる。しかし、一つだけ。そうだった一つだけジグルズに弱点があること

に気が付いた。

硬い頑丈な褐色の肌の色。それが一部分だけ……そう、背中の一部に微かだけど、薄くなっている部分がある。以前に確か、ジグルズの恋人であったワルキューレが、この頑丈な体は、戦いの最中魔法の掛かったファフニールの返り血を全体に浴び手に入れたと言っていた。だけど、そのワルキューレは、ジグルズの背中を守る事が自分のすべき事なのだと誓っていた。それは愛ゆえに言った言葉なのだろうか？ いや違うと思う。ならば、その血を浴びなかった部分が有ったのでは？

だから私は、

「ラーズ！ 背中 of 少し色あせた部分を狙って！」

と促した。そうする事が、今の一番の可能性だと思える。ラーズも疲労しきっているし。それにこれ以上の戦いは、無意味だと私は悟った。

「ティナ……了解！」

ラーズは、雷を伴いながら、ミヨルニルをジグルズに投げつける。それを、軽く避けるジグルズは次に跳ね返ってくるそのミヨルニルに対処するため反転した。しかし、ラーズはそのミヨルニルが返ってくる前に、ジグルズの腕を取り押さえ、時間を稼ぐ。そして、ミヨルニルが自らの手に戻ると、ジグルズを前方に突き飛ばし一歩引くと同時に、背中の色が褪せている所目掛けてミヨルニルを投げつける。

その瞬間、ジグルズは振り返ろうとしたが既に遅かった。ミヨルニルは、見事にジグルズの弱点を通り抜けラーズの手元に戻っていたのである。なんとと言う素早さなんだろう。私は瞬き一つせずそれを見届けた。

そしてこの勝負が決着したんだと私はラーズの傍に行き、そして、腕を取った。それから私達はジグルズを見た。

ジグルズは、そのままその場に倒れ、そして、光の泡と化したのである。それはまるで、

清い魂が浄化されるかの如く。

「転生したの……？」

私は、その神聖な一部分を目の当たりにし少し震えた。あの階段下からの光の泡も、あの時倒したベルセルク達の魂？

「そうです。ティナ。ジグルズは、転生を果たしました。次の生命の源となるために」

ラーズは、私が掴んでいるその腕へと手を伸ばし、静かにそっと私の手に触れてそう言った。まるで、これが必要なことであつたんだと説得するために。

「では、参りましょう。此処に長居は無用です。次からの試練は、此処の比ではありません。何しろ、オーデインを守る神々で、固められているのですから」

そのラーズの言葉に、私は確かにそうなんだと悟った。だから、自分なりに、より、気合を入れてみる。

私が知っている、ヴァルハラをもっとクリアに想いだすためにも。そして、先を進む。この真っ暗なヴァルハラの天空にひたすら二人の思いを寄せて……

#4 終焉の笛

暫く進むと、また階段がある。この階段はいくつあるのであろうか？

まず、ロキの居た場所から考えると、地上から天空へ向けられて上ってきた回数は？

そう、これで三回目。

オーデインの場所まで後どのくらいあるというのだろうか？ 私は途方もない気分になる。だけど、それが当たり前なのだろう。だって、主神オーデインに会いに行くのであるのだから……判っているのに不安が有るのは、多分、まだティナとしての自己が強いからなのかも。

確かにスクルドである私の記憶もあるよ。でも、それより、ティナの方が強い。だから、あの時トールド達にとどめをさせなかった。それが命取りにならないだろうか？ 心配だけど、でも、私は今、このラースと共に居る。だからまだ何とか保っているのかも知れない。

「あゝら。黄昏の女神様。何て顔してるんですの。もう怖くなりまして？」

なんて、エアリーが茶化してくる。それを私は苦笑いしながらコツンとエアリーの小さな額を指でこついた。

「いたっ！」

「そんな事ないわよ？」

そう、大丈夫。私は私の信念を……そう、ラグナロクのために、頑張らないといけないんだよね？ うん。判ってる。だから、踏ん張ってラースの後に続き、階段を上った。

上った先にはやはり同じ暗闇。そして緊張感溢れる張り詰めた空気。もう、慣れてしまったけど、違和感がないとは言えない。

そして、一步前に前進した時、ホルンの鳴る音が微かに聴こえて来た。それがだんだんと大きくなる。いつの間にか、耳を押さえな
いといけなくなるくらいに……

「あれは、ヘイムダルラグナロクの、終焉ラグナロクを告げる角笛……何てことだ」

ラーズは呟く様に言葉を発した。だけど私にはこれが何を意味するの
か判っていないかった。

「何？これが何なの？ラーズ」

「終焉……ラグナロクが滅ぶという時に吹かれる角笛なのです。テイナ。これが鳴るという事は、ヴァルハラ総動員して戦闘を開始する
という合図」

私は、鳴り響く角笛の音の中必死でその説明を聴いた。そして、
絶句した。何を如何すれば良いのであるうか？ 考えても今の私に
できる事などない。

そんな絶望的な中、視界が変わった。暗闇のこのヴァルハラの上
空が、オーロラの光で辺り一面を埋め尽くしている。そして、その
オーロラの中から、神が私達の前に舞い下りてきたのである。

「ラーズ皇子よ」

舞い降りてきたのは、テュール神であつた。

元は、オーディンと同じ主神格とも言われるほどの神。天空の神
と称されてる。確か、フェンリルという獣に片腕を食いちぎられ、
今はその片腕がない。それでも、やはり神としての存在は微動だに
していない。

「テュール神。此処まで出迎えてくださったという事は、ラグナロ
クを守るための算段を整えてくださるという事と取って良いのでし
ょうか？」

ラーズは、ここ一番重要とされる事を率直に問いかけた。

「ラグナロクの為に、スルト神の暴挙を止める為にもオーディンは、
私達神を遣わされました。勿論、此処まで放置していたのは、愚行
だったと思われます。しかし、オーディンは、指示を出さなかった。

それが何を示すのか、それは今の自分には計り知れません。とにかく、最上階までいらしてください。時間は、ヴェザンディ様が暫く止めてくださってます」

テュールは、取り急いでその旨を伝えと、七階まで有るその階段を上るように私達に言った。

階段を上る際、私は、ヴェルザンディお姉様が、時を操り、そして、ラグナロクを守ってくださいっていると判って、ホッとした。いや、ホッとしたのは私だけではないはず。きっとラーズも同じ気持ちであろう。

そんな気持ちを抱きつつ私達は、急いでその階段を上り、オーデインのいらっしゃるその階までたどり着いたのである。

最上階は、真つ白な館が建っている。その中は広間となっており、そして、今までの暗闇が嘘のように、天井は晴れ渡った空で覆われていた。その広間の奥。ベッドではよくある天蓋つきの椅子に、オーデインは座っていらっしゃった。

「ラーズ皇子よ。いや、トール神。役目ご苦労」

オーデインは、ゆったりと腰を落ち着けてそう言った。でも、ラーズの事を、トール神と言ったその言葉に、私は驚きを隠せなかった。

ラーズは、ラグナロクという国の皇子ではなかったの？ 神様の一人……だったなんて。でも、自分の過去を探ってみても、ラーズの記憶はない。ロキの事は今では判っているのに……その親友であったというラーズの記憶がないなんて、どうしてなの？

私は、ラグナロクの危機だというのに、そっちの方に頭の中は駆け巡る。だけど、オーデインとラーズの会話はそのまま続けられた。「いえ、我が意志は、ラグナロクのためだけにあります。主、オーデインよ。そして、未来の女神スクルド様を連れて参りました。これで、スルト神との戦は万全です。但し、ジグルズ様を失ったのは痛手。控えはいらっしゃいますでしょうか？」

ラーズはスラスラとオーディンに問いかけている。それはまるで、主神オーディンと何か言い交わした約束でもあるかのように感じられた。

「ジグルズに関しては、処置をしておる。転生しても、ジグルズの次の候補は決まっておるからな。ジグルズよ。此処に参れ」

オーディンの背後から、ジグルズと呼んだその者が出てくる。髪と肌の色は異なるが、確かに、ジグルズである。私は、この現象を凄いと思った。

もしかしたら、私の候補者であった、黄昏の女神様も、実際こんな感じで紹介されたのであろうか？ これも、主神オーディンのなせる技？

だけど疑問が残る。宿命は変わらないけど、このジグルズの心はあのジグルズと同じ物なのであろうか？ 私のように、記憶や気持ちはそのままなの？

だんだんと、この転生や、候補者の位置づけが判らなくなる。それでも、私達はラグナロクのために、戦わなければならない。この元凶、スルト神を倒すためにも……

「おゝい。ラーズ皇子」

と、ジグルズの紹介が終わった時、ロキがこのオーディンの広間にやってきた。ロキとしては、ラーズの事を親友と呼んでいるだけあって、話し方も軽い。あのヴァルハラの上での戦いも嘘のように肩を抱き合っている。

「ロキ、オーディンの意向だ、戦が始まる。お前も手伝ってくれ」
そう問いかけるラーズに、

「勿論さ。指示が出たら後はラグナロクのためにも、俺達のためにも、主、オーディンの為にも喜んで戦うぜ！」

何たる気楽さ。でも、彼の持っている気楽さは、和ませてくれる。この後の悲惨な世界を感じさせない。ラーズの堅実さ、ロキの奔放さ。これで成り立つ親友の絆。だからこそ、私は微笑ましくも感じ

られた。

そんな中、他の神々もこの場所に集まった。

何処からこんな風に見えるのか？全ては、ヘイムダルの、終焉を告げる角笛によるものだとするのは、そう時間は掛からなかった。

「我が、アース親族の子らよ、我に続け！」

オーデインの掛け声に、皆は自らの武器を天へ向けて突き上げた。私もそれに習う。がしかし、その私の傍にテュールがやってきたのである。

「スクルド様は、こちらへ……」

「え？」

そうテュールは、私には違う仕事があるとでも言いたげに、手をこちらへと差し伸べた。

それは、オーデインの椅子の後ろ。

私は、ラースを振り返った。しかし、ラースは、コクンと頷き「そうするのが、ティナ、貴方の役目です」と目配せした。エアリーも頑張っ
てねと言っているかのよう。そして、神々はオーデインの部屋を出て行ったのである。

私は、テュールの後続き、その椅子の後ろに向かった。そこには、下へと向かう階段があった。テュールは、「この階段を一人で行りてく
ださい」と指図する。下は、闇のように暗く、私は一瞬しり込みしそ
うになった。だけど、これが私の使命ならば、行かなければなら
ない。ラースもエアリーも一緒ではない、私たった一人で

……

そう心に誓い、私は、階段を下りる。すると、その階段の入り口を
テュールがパタンと閉じた。これで本当に一人。一瞬ソクツとし
たけれど、駄目。逃げちゃ……

そう思った瞬間、ポツと辺りが仄明るくなり風景が私の目に映り
こんできたのであった。まるで水族館のようだった。蒼白い光が
ゆらゆら。左右がガラス張りで、その向こうに、水がゆらゆら。そ
してその水の中に、今のラグナロクの光景が再現されていた。

スルト神の放った炎は、もうラグナロクの国境近くまで来ている。そして、スルト神の支配する配下達の、ムスツペル達が、辺りに火をばら撒き続ける。彼らが通る場所は火の道となっていた。

そんな中、ヴァルハラから旅立っていったオーディンを始めとする神々が、そのムスツペル達と対峙し、そして戦っていた。

私は、ドキドキしながらジッとその光景を眺めていた。ラーズは何処に居るの？何てその姿を追ってみる。だけど、突如、階段の下から聴こえて来る声に気が付きハッとそちらに視線を動かした。

「スクルド、貴女の役目を果たしなさい。今を変えられるのは、貴女しかないのよ！」

その声が、ヴェルザンディお姉様の物と判り、

「ヴェルザンディお姉様。私は何をすれば良いの？ 判らない。教えて！」

思わず、声を張り上げてしまっていた。

「取り敢えず、私のところまでいらつしやい。私が編んでいる、現在の糸を貴女が補正するの。それが、今貴女がすべき事の一つ」

私はその言葉に、「はい」と答えて必死で階段を駆け下りて行った。

周りのガラスの向こうの光景。それは、激しい戦闘。今、ロキがスムツペルの一人にグングニルを投げつけた。それを避けるスムツペルは次に戻ってくるグングニルで倒れた。

私は何とかなっているその戦況を横目に駆け下りて行ったのである。

「お久しぶりね、スクルド。再会の挨拶をしたいのは山々だけど、今はこの糸の状態を何とかしたいの。手伝ってくださいる？」

ヴェルザンディお姉様は、真っ白な何もない空間で糸を紡いでいた。それは、現在という細糸。ささくれ立ち、そして、こんがらがったその糸を必死で直そうとしているようだった。だけど、今のお姉様は目が不自由で、ハッキリとその糸が見えてはいなかった。

だから私がその糸を修正しなければならない。真っ直ぐに、そして、綺麗に編む。

だけど、編み方なんて教わった事などない。だから、お姉さまの助言でその糸を上手く修正するにとどまる。

ささくれ立った糸を、私の手で修正。黒ずみ、ほつれた糸は、私の手の中で透明な綺麗な糸に変わる。それを根気良くそして、丁寧に修正しながら、補正した。そして、編まなければならない。編み方は、独特の方法で、ヴェルザンディお姉さまは一つ一つ丁寧に「こうするのよ」と教えてくれた。その糸の形を見る。それは魔法文字ルーンだった。私は今このルーン文字を目で辿る。その文字の通り網目が間違っていないか？ それを一つ一つ。

だけど、どうしても一目だけ上手く行かない。それを解き、そして、もう一度。けれどそれも間違い。何度も何度も同じ目を何度も編む。しかし、網目はその部分だけ修正できない。

「ヴェルザンディお姉様……駄目。この目だけでも修正できない。どうして？ 私、頑張っているのよ？ それなのに……」

そう、自分は間違っただけで編んでなどいない。しかし、網目はそこだけ違った形を取る。

すると、お姉様は静かに、

「……スクルド。ここより下の階層に行つて、ウルズお姉さまに、修正の効く過去の網棒を貰ってきて下さる？ これは、過去の過去それを修正させるには、ウルズお姉さまの編み棒が必要。でも、今頃お姉さまも過去の糸を紡いでらっしゃるわ。先にそちらを手伝つて戻っていらっしゃい。待ってるわね」

そう言うのと、少し淋しそうににこっと笑った。

私は、その笑みの意味を理解できなかったが、直ぐ後、フツと私の座ってる床が消えた。その為私は、下へと落ちていった。

下層部まで一直線。私は、その空間を落ちてゆく。落ちていく中、あの階段と同じように、ガラス張りの水中の中今のラグナロクの戦

闘を目の当たりにした。

戦況は変わってはいなさそう。でも、何だか押され気味のように感じた。炎は瞬く間に広がっていく。

「あ、ラーズ！」

私は、その中にラーズの姿を目撃した。それは、ミヨルニルを駆使した戦い。でも、押されている。あのラーズが、ジグルズの時よりも苦戦しているように見受けられた。間合いも上手く取れず、気力も低下しつつある。

そんな時、ラーズの後ろに一人のワルキユーレがペガサスに乗り飛んできた。

「あれは、誰？」

私は此处にいる。でも、私に似ている。そう、赤毛のこの髪の毛が銀髪であるという違いだけで、容姿は、私と瓜二つ。そのワルキユーレは、ラーズの背中を守っている。付かず離れず、上手いコンビネーションで、スムンペル達を打ち倒す。

私はホッとしてその光景を見ていた。ラーズは無事。あのワルキユーレが誰だか判らなくてちょっと気になったけどそれでも無事を確認できただけ良かった。そう、その時はそう思った。

「いたっ！」

思った瞬間、私は下層部にお尻から落ちた。

「その声は、スクルド！ちょっと、早く来なさいよ。全く遅いんだから！」

ウルズお姉様のいつもの我が侬振りを思い出してそれがとても可笑しかった。

「ごめんなさい。ウルズお姉様。今、糸紡ぎはどんな感じですか？」と、ウルズお姉様の手元を見る。その手元は、ルーン文字を紡ぐ為に必死の様子。

「この一文字が編めなくてね。スクルド、何とかしてくれない？」と、私に一任しようとした。

「ちょっと、お姉様……私だって判りませんわ？それを……」

私は、苦笑いした。しかし返ってきた言葉は、

「このルーン文字を完成させるのはあたしの仕事だった。でも、それを狂わせたのは、貴女なの。スクルド……貴女が、この文字を完成させないと、もう、過去は変えられない……」

勝気なお姉様の瞳が、意味ありげに私を射抜く。まるで、こうなつた元凶は、私にあるかの如く。

「な……何です？ 私が、この系紬の……過去のルーン文字を狂わせたのですか？ そんなはずは……」

私は、そんな記憶などない。それは、私が記憶を全て取り戻してないから？ まだ知らない過去……それに何か意味があると言うの？

「スクルド……想い出して。貴女は、どうして転生したの？ 私達姉妹。そして、ラーズ皇子。いえ、トール神の事を想い出すのよ。それを想いださない限り、過去を変える事なんて出来ないのよ！」
ウルズお姉様は、厳しい目で私を見つめた。

それは、脅迫のようにも感じられる。私は、怖くなった。ウルズお姉様の言うように、きっと想い出したら、全ての過去が上手く循環する。しかし、私のその過去は、何だか想い出すべきではないような気がする。

危険信号が点滅する。脳内で……

「ほら、見えて来るわよ。スクルド、貴女の過去が。ほら、ほら……」

……

それは呪文の様……まるで催眠術でも掛けられたかのように、私の脳裏を波ガラスは覆う。それは、ドンドンと大きく揺れた。そして、私は、過去へと旅立った。

#5 断罪

「あゝん。久しぶり！スクルド！」

何て言葉が、ハツと気が付いた時に耳に入った。そして、ギョツと抱きしめられた。

「まあ、ウルズお姉様ったら、フッフ」

私は、そんな事を喋ったつもりなど無いのに勝手に口は動く。

周りは、緑溢れる綺麗な森。そして、射し込む陽の光はさんと降り注がれてくる。

此処は、世界樹である、ユグドラシルの生えている、ウルザルブルンと言う泉のほとり。

私は、この場所をちゃんと知っている。そう、私達ノルニルの居場所。此処で、世界樹に泉の水を汲んでは掛けて育てていたのだから。しかし、私は、ワルキューレであるために、そう、ヴァルハラを守る役目を担っていた。

「あら、スクルドお帰りなさい。少しは休んで下さいね？」

泉の水を汲みながら、ヴェルザンディお姉様は、私に微笑みかけてくれた。そう、私は、仕事の合間をぬぐっては、此処に帰っていた。

「で、どう？ヴァルハラの方は！」

ウルズお姉様は、私に泉の辺に座るように促しながら問いかける。私は、その通り座った。そして、話をする前に、顔を洗おうとそつと泉の水を汲もうと泉を覗き込むように見る。そこで凍りついた。その泉に映っている私の髪の毛は、金髪だった。そして、ワルキューレの武具を身につけているその姿は、あの時、ウルズお姉さまのいる下層部へと移動している時、ラーズ皇子の背中を守っているあのワルキューレと全く同じ姿であった。但し銀髪という事以外は。心の中で、慌てふためいている自分。でも、此処では、それを表に出す事が適わない。だって、これは、スクルド自身の過去なのだ。

から……

「あら、何も変わらなくてよ？　ただ、その……私、婚約することになるかも……なのですよ。お姉様方！」

私の口は勝手に動く。一体誰と？　私は、言葉に驚きながらも、頬を染めた。

「えー！おめでとうー！スクルドが一番乗りか！姉のあたしは、未だなのね？　ちょっと悔しいわね」

ウルズお姉様は、冗談交じりに肘でつつく。

「あら、お姉様だって、よく戦士達とお話してらっしゃるじゃない。チャンスくらいあるわ！」

「あんなの、あたしの好みじゃないわよ」

ウルズお姉様は、ハーツとため息をつく。

「ウルズお姉様に関してはともかく。スクルド。それは、おめでたいわ。で、お相手はどなたなの？　やはり、ヴァルハラの方？」

ヴェルザンデイお姉様は、それはおめでたいと水汲みの手を止めて、私の座っている隣へと座った。

「ええ。そうなんです。お名前は、トール神ですの」

私は、そこでトール神。ラーズの名前を言った。確かに言ったのである。

そこで、画像が波を打った。私の記憶。ラーズは、私の婚約者だった。そう、婚約者だったのよ！

戦があれば、戦うワルキューレ。ヴァルハラのため、オーディンのため、そして、この世界を守るために私は働いた。そして、心穏やかで、強くあり、主を尊敬する頼もしいラーズを愛した。

そんなラーズの背中を守るのは私の役目だった。そう、私達はちゃんと愛し合っていた。

その記憶がドンドンと心に滲んで来る。

でも、何故彼の記憶だけ封印されてたの？判らない……懐かしさも感じなかった。まるで、赤の他人のように、彼への記憶だけ封印されていた。それは、私が封じたの？　判らない……どんなに考え

ても判らないのである。まるで、そこだけ白紙状態。

でも、この募る想いは、ラーズとの絆は、今ここにちゃんとある。そんな事を虚ろな空間で考えていた。が次の瞬間、場面はヴァルハラのおーディンの広間に変わった。それは、私とラーズの結婚式を執り行う場所。私は、その前に身だしなみをもう一度確かめに行く。そんな、幸せな時だった。

私は、大きな鏡の前で、白いウェディングドレスを纏い、紫水晶のティアラを頭に飾っているその姿を確かめた。これは、この世界に来る時に見たその女性。ああ、あの懐かしさは私自身だったんだと思うと、心が苦しくなる。こんな幸せな時を得て、笑顔を絶やしていない自分。ティナとしても幸せだった。

でも、今、この記憶を取り戻した自分にとって幸せの絶頂なのだ。懐かしいと言うより、もう、自分は完全にスクルドになっている。

そして、広間に出て、式は執り行われた。

おーディンの言葉が心に響く。そして、ラーズとの誓いのキス……そう、そのキスをしようとした瞬間に、来たのである。そう、終焉を迎えるヘイムダルの最期の角笛の音が鳴り響くその瞬間が！

誰もが予期しなかった。その瞬間など。そう、ヴァルハラは光に満ちた世界。その世界が壊れようとしている。

「我が子らよ！終焉。ラグナロクの時が来た！こんな時だからこそ、慎重に戦うのだ！この世界を守る為にも我の後に続け！」

そう、おーディンは取り急ぎ言葉を発すると、戦準備に取り掛かる。回りもざわめいたが、その言葉で神々は個々の持ち場を確認した。そして、ヴァルハラを後にする。

「スクルド……この式は、この戦を乗り切ってからだな。お互い、生き延びよう」

そう言つと、ラーズは、着替えると戦に出ようとした。しかし、私は自分の幸せの事しか考えずに、ラグナロクに備えるラーズに、「これを飲んで。そして、互いにラグナロクを乗り切りましょう。これはその前の祝杯」

薬を使つて押し留めたのである。

身勝手だった。私のしたことはただの自己満足。そう、ラーズは、そんな私の気持を曲げきれず、戦に出ずに……

ラグナロクは、トール神を欠いて本当に訪れた。そう、アース親族。そして、ヴァルハラは消滅……この世界の破滅に繋がったのである。燃え上がる炎の中で……

「思い出した？ スクルド……」

目を覚ますと、目の前にウルズお姉様が居た。そして、絶えず過去の糸を紡いでいる。それは紡ぎ切れるはずがない物。私は、涙でそれが曇った。

「私は、皆を殺した……皆を見殺した。何て事を！」

涙声で叫んだ。私が、元凶だったなんて。じゃあ何故ヴァルハラはあるの？ これは夢？ それとも過去の業の後始末？

「これを編みなさい。貴女にしか編めないの。判るでしょう？ 神々は、もう、貴女を許してる。あたしも勿論許してる。ただ、魂が止まったこの世界を、進めて頂戴！ それが貴女のすべき事なの……」

ウルズお姉様は、そう言つて微笑んでくれた。私の過ち。それを今この手で……

ルーン文字の網目は、途中で間違っている。私は、それを作り変える。

「希望よ。我が主と、この世界を導き給え。この過ちを、心の闇を導き給え！」

そう、私は編みこんだ。すると、この部屋は、世界樹のある木々の有る場所に変わった。

「行きなさい。貴女はまだする事があるでしょ？ そう、まだルーンは完璧じゃない。ヴェルザンディの所にこの過去の編み棒を持つて行き、貴方の今の役目を果たしなさい……スクルド、あなた自身でね？」

ウルドお姉様はそう言つて、光の泡のように消えた。私は止め処ない涙で、それを見送った。そして、指笛を吹く。すると、ペガサスがこの場所にやってきた。

「ペガサス。ヴェルザンディお姉さまの所へ！」

「承知！」

ドンドンと上昇する。そう、あの場所へとたどり着くために。

「ヴェルザンディお姉様……戻りました。今からその糸を紡ぎ直します。私の過ちで終わり、そのまま止まった世界を開放するために！」

その言葉に、何も言わずにつこりとヴェルザンディお姉様は微笑まれた。それが私への労わりだと判り、また大粒の涙が零れた。

「未来よ！ 今こそ開かれん！ 我が名の下に、平和な世界の元に！ いざ、魂よ解き放て！」

そうウルズお姉さまの編み棒で編みこんだ。それは、私の想い。そして、この世界の未来を開くための魔法。

すると、その系紡ぎは七色の光を放ちあの頃のヴァルハラが再現された。

「これで後はあなた自身で、未来に魔法を掛けなさい。その鍵は、ツール神自身が持っています。私が言えるのは此処まで。後は貴女がすべき事。じゃあ、また何処かでね。スクールド……」

そう言つて、ヴェルザンディお姉様はウルズお姉さまのように光の泡となって消えた。

そう、後は、ラース。私が愛した、たった一人の神様。そして、過ちを犯してしまった自分を支えようとしてくれたその人の所に行かなければならない。でも、彼はこんな私を許してくれているの？

本当に……

主を大事とし、この世界を愛していた彼が、こんな事をしでかした自分を？

此処に来るまでに、色んな彼の側面を見てきたつもりだった。で

も、その本心は本当に許してくれていると言っの？

心はくじける。でも、こんな自分をお姉様方は許してくださっていた。それだけが希望。

だから、その言葉を信じて、私はまたペガサスに乗り、上空へと昇っていった。

広間は閑散としていた。当たり前だ。皆、あの時と同じラグナロクが訪れ、ヴァルハラの外へと戦に出ているのだから。

私は、広間の外に出るように、ペガサスに命じる。そして、ヴァルハラの外へと目指した。

ヴァルハラの外は、火の海だった。あの時と同じ、炎の世界。スルト神の力は、絶大だった。

時は繰り返され、そして、今はまだその巻き戻された時間帯。

「ラグナロクという国は無かったのね……此処は、アースガルズ。神々だけでなく人も住む世界。そして、あの豊かだった平原は、イザヴェル。完全に想い出したわ。ラーズはそれを、わざと私を傷つけないために嘘をついたのだわ……」

まだ、オーディンも、ラーズも、ロキもその他の数々の神々も生きています。気配がある。

こんな世界で、彼らはまだ戦っている。

そう、ヴァルハラを守ろうとして。

だから、私はまず、オーディンの所に赴いた。

「我が主よ。この戦、私が止めます！そして、全てを終わらせます。それが私の定め。過去の事を許して欲しいとは言いません。だから今は、私にこの場を！」

オーディンは、愛馬である八本の脚のあるスネイプニルを操りながら、コクント頷いた。

そして、

「スクルドよ。お前の罪は重いかも知れない。だが、我も、あんな

幸せな時をお前のために割いてやれなかった。その事はすまなかったと思っている。だから、そんな顔をするではない。もしあの時、トール神が出向かなくとも、アースガルズが消滅しなかったと言いつれまい？ 誰も、もう、恨んではおらんよ。ただ、この輪廻のような悪夢を断ち切ってくれ。それが願いだ……」

そう言つて、オーデインはスネイプニルを操り果敢にスルト神へと向かつていった。

「ありがたきお言葉…… スクルド、全身全霊を込めて、この輪廻を断ち切ります！」

そうして、私は、自分の愛したラースの元へとペガサスを飛ばせた。

ラースは、一人、楔帷子を身につけた胸から血を流しそして、ミョルニルをムスッペルに投げつけていた。

それも宙をきるだけで何の効力も無い。

そんな火の回った場所に、私はペガサスから飛び降り、剣を抜きラースの背後に立った。

「ごめんなさいね。ラース……私、間違っていたわ……死ぬ時は、私も一緒よ！ 私は未来を司るワルキューレなんだから！」

そう、恥ずかしげも無くただ、罪を悔いた気持ちを大声で言った。「もう良いですよ。ティナ。私こそ、貴女に嘘を言つてまで、この狂った世界をどうにかしたかったという気持ちがありました。だから、貴女だけが転生したその運命が羨ましかった。いや、それだけじゃなかったかな？ もう一度、貴女に会いたかった。それが本心なのかも知れません」

ラースは、戻ってきたミョルニルを握むと、定めた敵に向かい雷をも込めてもう一度投げた。

「私が記憶をなくしていても？ それでも会いたかった？」

私は、この炎が消えてしまえと思うくらいボロボロと涙を流しながら、剣を振る。

「ええ。勿論です。もし貴女が、ラグナロクを引き寄せても、貴女

だけが、私の女神様なのですからね」

そう言って、振り返ると、ギユツと抱きしめて、軽く口づけをした。

「愛してます。ティナ。もし生まれ変わったなら、また貴女の傍に……私が居る事を心から願います」

これは、あの時の続き。私は、ギユツとラーズの腰を抱き返す。そして、全てを終わらす為に、この狂った連鎖を断ち切るために、ラーズを、自らの剣で貫く。

「我は、この呪縛を解かん！ スクルドの名において、全てを無に！ そして、皆に輝ける未来を！」

引き抜いた血の滴る剣を翳しルーンを唱えた。

もう涙で何もかもが曇って見える。愛する人を殺す事。これで、全てが終わる。そう、この悪夢を見る事はない。それが、このアース神族の終わり。ヴァルハラの消滅。

世界は、火の海から暗闇とオーロラを携えた空で広がった。そして、私は、自らの命をその剣を持って断ったのである。

#6 再会そして始まり

「ティナちゃんももう、準備は出来たかな？そろそろパーティーの準備が出来るわよ」

私は、眠っていたのか、ドレッサーの前で蹲っていた。それは、もう、外が夜といった時間帯であった。

「あれ……私、寝ていたの？」

ドレスもそのまま、うつ伏してその場からむくつと顔を起こす。鏡を見て驚いた。涙でほんのり化粧していたマスカラが、頬に黒く滲んでいる。

「私……何故泣いてるのよ……悲しかったのかな？ 変なの」
そう一人ごちると、まだパーティーの仕度が出来ていない事に慌てて、取り掛かる。

「ドレス……やっぱり純白が良いかな？ うん。これでよし！ 後は、もう一度化粧直しをしなきゃ！」

なんて、ゆっくり考える。

でも、何だか忘れている事があるような？

だけどそれが何だか判らない。

「忘れるという事は、気に留めることも無いってことかな？」

っ単純にそう考えた。

そして、身支度は終わった。

「お誕生日おめでとう！ティナ！」

そう言ったのは、昔から仲の良い、ローゼだった。

「ありがとう。ローゼ。あ、狭いけど入って入って！ 今日、一緒に楽しもうね！」

私が主役のパーティー。ここは盛り上げなきゃね。

「あとは、キャサリンと、マリナね？」

集まるであろう、女友達の名前を並べてみる。

「あの二人はもう少し待つてあげて？ バイト後に実は大変なプレゼントを用意して行くからって張り切っているのよ」

ローゼは、フフフって含み笑い。全く何を考えているのやら？

「じゃあ、先に席に着いて待つてようゝあ、お母さん。ケーキ出来てる？ 私運ぶよ！」

私は、バタバタとキッチンへと向かう。

「はいはい。もう出来てますよ。蠟燭もちゃんと用意してますからね」

お母さんも嬉しそう。そうよね。自分の娘の誕生日なんですから！
私は、腰に手をやりクスクスと笑った。

「ティナちゃんは何もなくて良いから、お友達とお話でもしてなさい。貴女が主役なんだから！」

それもそうね？ そう納得すると、ローゼと残りの二人が来るまでお喋りをしていた。

私とローゼは時計も気にせずハイスクールの話題をしている、そんなパーティーが始まるそろそろな予定時刻。玄関のベルがキンコンと鳴った。

「キャサリンとマリアかな？」

私は、いそいそとドレスの裾を気にしながら玄関へと駆けっていく。扉を開くと、玄関前でニタリって笑っている二人が雁首揃えていた。

「何よゝその笑いは……私の顔に何か付いてる？」

思わず、私は自らの顔を手で触ってみた。でも、特別何か付いてそうにも無い。

「うふふゝ今日は、ティナに大切なご友人を紹介しちゃおうかなゝなんて思ってた！」

そう、キャサリンは、ミニスカートを躍らせながら唇に指を乗せて私を意味ありげに下から覗き上げ軽くウィンクした。

「はあ？」

私に大切な友人？ そんなの、此処に来てる三人だけじゃない。思ったが、そのキャサリンの言葉を受け継ぐように、マリアが、「ジャジャーン！この方です」

なんていうノリの良さ。マリアは、背の高さを利用して、私の前に右人差し指を突き出した。そして、二人はカーテンでも開くかのように左右に寄った。

その背後から、一人の男性が、スッと現れたのである。銀髪のおさふさした髪のに、切れ長の目尻、ラベンダー色の綺麗な瞳。それが私を見つめていた。

「え？」

私は、目を丸くするしかなかった。だって男の子じゃないですが。でも、何だろう。この感じは……

何処かで逢った事があるような気がする。それは見た目じゃない。そう雰囲気。かもし出すそのオーラみたいな物がそう私を懐かしさに誘った。気づかない内に、ポロツと涙が零れ出すほどに、今の私は何故か胸がドクドク音を立てている。

「あの、憶えてますか？僕の事……」

その男の子は、焦った感じで、問いかけてきた。

「五歳の時までちょっとだけ森の向こうに住んでいた、トールです。その……学校も違うし、ティナちゃんと逢うこと無かったから、覚えてないかもって、この二人には言っただけ……」

そのトールという男の子は、そんな事を言いながら、ちゃんと正装して来ている訳で。私のハイスクールは、女の子しか通わせてくれない女子高だから勿論、学校で会うわけは無い。

「あーら。逢わせて欲しいって、言ってきたのは何処のどなたかしら？」

キャサリンが隣から茶々を入れた。

「そうそう、ティナちゃんの誕生日。僕も祝いたいな〜なんて呟いて、私達に付き纏ったのは何処のどなたかしら？」

マリアは、本音をばらすし。

「あ、その……これっ！　では！」

そう言つと、そのトールって男の子は、紅茶色のバラの花束を私に差し出して踵を返そうとした。

「あ、ちよつと待って！……その……トール君？」

私は、思わず呼び止めていた。いえ、呼び止めなくちゃいけないんだと勝手に口がそう言葉を発していた。

「えつと、トール君。憶えているよ。確かに、森の向こうに住んでいたよね？」

ただ一人、そう、たった一度だけ外で遊んだことのある男の子。

幼稚園も違つたし、直ぐに引越してしまつたから、懐かしいと感じるはずも無いのに、今私は、あの時のことをハッキリと鮮明に想い出す事が出来た。

「数人の女の子達と一緒にかくれんぼをして遊んだよね？　で、トール君が鬼になつて」

そう、かくれんぼをしたんだつた。

「あ、はい！　そうです」

トール君は、嬉しそうに相槌を打つた。

「それである時、この一帯、草原と森が広がっていて隠れる所一杯あつて、私、見つけ出されるのに凄く時間が掛かつたのよね。それで、夕方になつても見つけ出されなくて、それでも私、隠れていきやいけないんだと思つて隠れていたら夜になつちゃつて……」

そうそう、そんな事があつたあつた。

暗い森の中は怖くて心細くて、思わず泣き出しちゃつたんだつて。「で、流石にお腹も減つて、もしかしたら忘れられてるんじゃないかって帰ろうとしたら迷子になつて、森の中をうろろしてたら……そう、トール君がちゃんと探しに来てくれたんだつたよね！」

私は、その時のことを頭に描きながら物語の一遍を語るように喋つてしまつた。

「はい。その時のトールです。あの時の約束は憶えていますか？」
約束？　何だろう……でも、確かに何かあの時約束をした気がする。

「何？ 何？」

「どんなお約束をしたのかな？」

キャサリンとマリアは興味深げに私を見ていた。

それは、とても重要な事だったはず。ちよつと小首を傾げている私に、

「道を忘れたら……」

トール君は、ぼそつと呟いた。あつ！

「思い出しました！」

そう、『道を忘れたら、僕が必ずティナちゃんを、見つけ出すから』だ。そう言っ指切りをし、私をちゃんと家まで手を繋いで送り届けてくれたんだったよね。

「何よーティナ。教えなさいよー！」

「そうそう。減るもんじゃ無いでしょう？」

茶々を入れる二人に、私は、

「想い出は、心の中に秘めておく物よ？ 教えたら、素敵な魔法が解けてしまっちゃうわ？ そうよね。トール君！」

私は、すっかり想い出して、心の中が温かくなった。それは、二人だけの秘密。

「では、僕は帰りますね。お祝いの花束も渡せましたし」

トール君は、そう言っそそくさと帰ろうとしてけれど、私は呼び止めた。

「キャサリンと、マリアが連れてきてくれた、素敵なお友達ですもの、一緒に私の誕生日を祝っくださりませんか？」

私は、今幸せな気分。ちゃんとあんな約束を憶えてくれた人が居た。そして、それは、幼少時というより、もっと強い繋がりを感じさせられている。そうもつと過去の……

「良いのですか？僕が居ても……」

「はい。祝っ下る方は多い方が私も嬉しいですから。皆さんお入りくださいね」

そう言っ、私は笑っ家奥、パーティーをするリビングへと

向かった。

その後をトール君の背中を押しながらキャサリンとマリアが続く。そして、

「そうよゝさて、これから面白くなりそうね。マリア？」

「楽しくなりそうゝな予感よね、キャサリン？」

こうして、私の十八歳の誕生日のお祝いは幕を上げた。それは、これからどうなるか判らない明るい未来への一歩。また一つ年を取り、色んな友人を作り、そして、恋人も……世界は広がる。この私の中で。

時々、黄昏時、何か私にしか感じていなかった事が有った様に感じて、部屋に入ることがある。でも、それは今では何だったのか想い出せない。だけど、私は明るい明日が来る事を待ちわびながら日々過ごしている。

過去があり、現在があり、未来がある。

そんな世界の秩序の中で、また一つ物語りは始まる。

それは、希望という言葉を、皆さんの心に残るようと、神々の紡いだ糸なのかもしれませんね？

貴女の身近で、もしかしたら、その糸はもう紡がれているかもしれませんよ？

#6 再会そして始まり（後書き）

書きたいところが書いて楽しかった作品でした。

神話に出てくるトール神は、スクルドとは何の関係もありません。

でも何だかあたしの中で盛り上がってしまったという・・・

一年前の夏に書いた作品でしたが、心の中は春だなとか・・・

ラグナロクは、もっとすさまじいところもありますが、神々のこういった闘いを封じ込め、そして、様々な生をこの世に受けなおしていれば良いなと想いました。

あちらの方に転生とか輪廻とかそういう概念はありえないけれど。

東洋のしそうですし・・・

何かしら心に残ってくださいなれば本望です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1954g/>

HEAVEN'S DOOR

2010年10月8日14時25分発行